

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：28003

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K10720

研究課題名（和文）離島・へき地で働く看護職者のキャリア発達支援と継続教育方法の検討

研究課題名（英文）Supporting the career development of nurses working in remote islands and remote areas and examining methods of continuing education.

研究代表者

清水 かおり（Shimizu, Kaori）

名桜大学・健康科学部・上級准教授

研究者番号：10284663

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、離島・へき地で勤務する看護職者に適した継続教育・キャリア発達支援方法について検討し、「支援を届けるシステム」を構築することである。公衆衛生看護師への調査より、その地区を深く知り、発見した課題に適したアプローチ方法を選び、高い倫理性を持ち関わることで、地区住民から受け容れられ、成果ある活動へとつながることが明らかとなった。また、へき地病院への看護研究支援を通し、「支援を届けるシステム」は、対面による直接的方法だけでなく、オンラインによるリアルタイムの支援や、メールやLINEなど有用なSNSを使用し、遠隔でも気軽に届けられることが実践により明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究結果から、「支援を届けるシステム」が対面による直接的方法だけでなく、オンラインによるリアルタイムの支援や、メールやLINEなど有用なSNSを使用し、遠隔でも気軽に届けられることを実践により明らかにした。その内容は、ICLSコースのような提供側でテーマを決定し定期開催するもの、受ける側のニーズにタイムリーに応えるものと、どちらも有効である。タイムリーに支援する場合は、受ける側を理解し、提供内容や方法にも柔軟に対応することが有効である。提供する側には、成人学習理論、職業倫理などを学習し、教育する立場として必要な知識・技術・態度をブラッシュアップしていくことが必要であることへの示唆を得た。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine methods of supporting continuing education and career development suitable for nurses working on remote islands and in remote areas, and to establish a 'system for delivering support'. From a survey of public health nurses, it became clear that by learning about the area in depth, choosing an approach suitable for the issues found, and being involved with a high level of ethics, it is possible to gain acceptance from the local population and lead to successful activities. In addition, through the nursing research support to remote area hospitals, it became clear through practice that the 'support delivery system' can be delivered not only directly in person, but also remotely through online real-time support and useful SNS such as email and LINE.

研究分野：看護教育学

キーワード：看護継続教育 離島・へき地 ルーラルナースング キャリア発達支援

1. 研究開始当初の背景

沖縄県は 39 の有人離島を有し、群島主島型の宮古島、石垣島、久米島の 3 カ所には病院が設置されており、残り 36 島のうち 16 島 (17 カ所) には県立診療所、3 島には町村立診療所の計 20 診療所が設置されている。沖縄県の離島・へき地の看護職者は診療所に 1 人の看護師、役場に 1 人の保健師というように孤軍奮闘していることも少なくない。離島・へき地の看護実践の特徴は、高度な知識と実践技術をもつジェネラリストであること、実践領域が多岐 (健康増進活動、慢性疾患ケア、外科処置、助産、緩和ケア、看取りなど) にわたること、医療全般の専門職としての役割を託されることなどが挙げられるが、地理的特性から継続教育の機会を得にくく、知識・情報の入手手段も限られており、医療職者への専門職者としての実践面での支援、精神的支援が重要と考える。

Desley (2003) は、ルーラル/リモートエリアナーシングに関する 7 つ勧告の中で、雇用者は看護師確保・定着のために、定期的な代替看護師派遣などの費用負担、適正水準の人的、財政および物的資源が備わった職場環境の提供、ICT へのアクセスおよび使用に必要な教育提供の必要性を述べている。八田ら (2000) は、ルーラル地域で働く看護職は看護に必要な知識・技術を向上させる研修の機会が得られにくい、交代要員の確保が困難なことにより研修参加が困難である、情報・知識が必要となったとき自己学習方法や情報・知識の入手方法の選択肢が限られている、インターネットからの情報を得ることや看護職・関係職種との交流会が少ないことなどを明らかにしている。

沖縄県立中部病院では、沖縄県立離島診療所で勤務する医師の支援として、臨床講義を多地点テレビ会議システムにて毎日配信している。この支援は離島診療所に勤務する医師の孤立化を防ぎ、知識・技術のブラッシュアップにつながっている。この支援方法も参考にし、離島・へき地で働く看護職者にも、直接出向く支援、ICT 等を使用した遠隔支援両方の「支援を届けるシステム」を築きたいと考えている。また、離島・へき地の医療職者は、勤務する地へ移住し生活することで、住民の一員としての役割と専門職者としての役割を發揮する。これまでに離島・へき地での勤務経験のある医療者 (看護師、医師) の語りから、離島・へき地の地域特性をどのように捉え、専門職者としての実践に関連づけているのかを明らかにできると考える。離島・へき地で働く看護職のより良い看護実践に必要な心得、生活者として自身を投入する秘訣などの「経験知」「実践知」を蓄積し、良いムーブメントを起こす思考や行動を明らかにしたい。

2. 研究の目的

本研究の目的は、離島・へき地で勤務する看護職者に適した継続教育・キャリア発達支援方法について検討し、離島・へき地の看護職者へ「支援を届けるシステム」を構築することである。

3. 研究の方法

本研究は以下の内容を実施した。

- 1) 調査 1：駐在公衆衛生看護師の文献レビューと、駐在公衆衛生看護師として離島・へき地に駐在をした経験のある保健師へのインタビュー調査の実施
- 2) 調査 2：「ドクターヘリに初めて同乗する家族が抱く困難感と支援方法の検討 -離島からの搬送に焦点を当てて-」というテーマで調査の実施
- 3) 調査 3：臨床看護研究に関する文献検討
- 4) 継続教育支援 1：「美ら島ナース支援研究会」による継続教育を目的とした研修会の実施
- 5) 継続教育支援 2：離島・へき地に勤務する看護師への継続教育（看護研究支援）

4. 研究の成果

- 1) 調査 1：2019（令和 1）年度に、離島・へき地経験のある医療職者として、駐在公衆衛生看護師の経験を有する保健師の「経験値」「実践知」を明らかにするため、駐在公衆衛生看護師の文献レビューを行うと共に、駐在公衆衛生看護師として離島・へき地に駐在をした経験のある保健師にインタビューを実施した。公衆衛生看護事業には、12 の原則があり、公看活動はそれを支えに行われていた。この 12 の原則は、1936 年（昭和 11 年）アメリカのメアリー・S・ガードナーによって書かれた「公衆衛生看護学」に記載されている。今から 80 年以上も前に作られたにもかかわらず、エスノグラフィの手法、成人学習理論、他職種協働連携、職業倫理など、地域で活動する看護専門職者として備えるべき内容が含まれている。公衆衛生看護師が公看活動をする際は、常に 12 の原則を拠り所にしてきた。離島・へき地などの地区に駐在して活動した公衆衛生看護婦は、公看の基礎教育で 12 の原則を徹底的に教育されてきた。だからこそ、原則に基づき活動し、その地区を住民としても看護専門職者としても深く知り、課題を見つけ、解決のために適したアプローチ方法を選択し、高い倫理性を持った態度で関わり、地区住民から受け容れられ、その活動は成果をあげていた。文献レビュー、インタビュー内容をまとめた内容は、2020(令和 2)年度に書籍の一部として発刊された。
- 2) 調査 2：患者の家族が初めてドクターヘリに搭乗した際に、困難に感じたことや抱いた感情や思いをもとに同乗家族にどのような支援が必要であるかを明らかにし、離島診療所看護師・フライトナース・ER 看護師による同乗家族へのより良い看護実践方法を検討し、卒業研究発表会で公表した。
- 3) 調査 3：臨床看護研究に関する 21 文献について文献研究を行った。その結果、多くの看護師は、研究プロセスや研究論文作成について充分学んでいない中で研究に取り組み、施設内の研究指導者も同様に、充分学んでいない中で研究指導に当たっていることが明らかになった。現場の臨床研究指導者不足を指摘しているが、その対策として大学等外部の支援方法の充実を目指すものが多く、現場の臨床研究指導者育成に関わるものはほとんどみられなかった。施設内での持続的でタイムリーな研究支援には、臨床看護研究の院内指導者を養成が必要であることが示唆された。

- 4) 継続教育支援 1：離島・へき地で働く看護職の知識・技術ブラッシュアップや相談出来る場づくりを目的に、平成 25 年に立ち上げた「美ら島ナース支援研究会」による研修会を実施した。COVID-19 が 2 類相当から 5 類に引き下げられたこともあり、美ら島ナース支援研究会、名桜大学看護実践研究センター、ICLS コースを 1 回開催した。
- 5) 継続教育支援 2：へき地にある病院の看護研究支援
- ・ 2020(令和 2)年度：へき地にある病院の看護研究支援であり、研究テーマの選定、文献検索、研究計画書作成、データ分析方法、結果のまとめなど部署毎に zoom ミーティングシステムを使用したリアルタイム、メールや LINE を用いた個別指導を行った。COVID-19 の感染拡大に伴い、完全遠隔での継続教育となった。
 - ・ 2021(令和 3)年度：前年度に引き続き、COVID-19 の感染が拡大したため、対面による研修会とオンラインの研修会をハイブリッドで開催した。研修会の内容はへき地にある病院の看護研究支援であり、研究テーマの選定、文献検索、研究計画書作成、データ分析方法、結果のまとめなど部署毎に zoom ミーティングシステムを使用したリアルタイム、メールや LINE を用いた個別指導を行った。対面による研修会は 3 回（全体 2 回、個別相談 1 回 2 部署）で、オンラインでの研修会（個別相談）は 8 回（のべ 20 部署）であった。
 - ・ 2022(令和 4)年度：COVID-19 の感染拡大が継続していたため、前年度同様に対面とオンラインのハイブリッドで研修会を開催した。研修会の内容はへき地にある病院の看護研究支援であり、研究テーマの選定、文献検索、研究計画書作成、データ分析方法、結果のまとめなど部署毎に少人数での対面、あるいは zoom ミーティングシステムを使用したリアルタイム、メールや LINE を用いた個別指導を行った。対面による研修会は 14 回（全体 1 回、個別相談 13 回 10 部署）で、オンラインでの研修会（個別相談）は 3 回（2 部署）であった。
 - ・ 2023(令和 5)年度：引き続き、対面と ICT を併用しへき地にある病院の看護研究支援を実施した。その内容は、研究テーマの選定、文献検索、研究計画書作成、データ分析方法、結果のまとめなどであり、部署毎に少人数での対面、オンラインミーティング（zoom、LINE）を使用したリアルタイム、メールや LINE チャットを用いた個別指導を行った。対面による個別相談 3 回、オンラインでの個別相談 2 回であった。

5. 引用・参考文献

D. Hegney (2003), Rural and remote area nursing: An Australian perspective, Online Journal of Rural Nursing and Health Care, 3(1).

八田勘司ら(2000), ルーラルナーシング概念枠組みモデル, 平成 12 年度研究開発事業, 三重県立看護大学地域交流研究センター年報, 3(7), 43-48.

金城妙子、高江洲郁子(2002), 原点をみつめて -沖縄の公衆衛生看護事情-, 沖縄コロニー印刷, 沖縄県.

路璐, 北池正, 池崎澄江. (2019). 千葉県内の病院における看護研究の支援状況の実態と課題. 日本看護研究学会雑誌, 42(2), 241-248.

仲里幸子 (1977): 沖縄県の公衆衛生看護事業 -30 周年記念誌-, 沖縄コロニー印刷, 沖縄県 .

沖縄県福祉保健部健康増進課 (1999), 人びとの暮らしと共に 45 年 -沖縄の駐在保健婦活動-.
グローバル企画印刷株式会社, 沖縄県 .

坂下玲子, 北島洋子, 西平倫子, 宮芝智子, 西谷美保, 太尾元美. (2013). 中・大規模病院における看護研究に関する全国調査. 日本看護科学会誌, 33(1), 91-97.

杉村鮎美, 東野督子, 水谷聖子, 石黒千映子, 大野晶子, 柿原加代子, 三河内憲子. (2017). 大学として取り組むことができる中小規模病院における看護研究支援プログラムの実践効果: データ収集から分析支援の展開期. 日本看護医療学会雑誌, 19(2), 72-81.

吉川千恵子 (2017, 沖縄の看護行政 70 年のあしあと -1945 (S25) 年~2015 (H27) 年まで-, 彩優印刷, 沖縄県 .

吉川千恵子 (2007), 退職記念誌「看護職者としての実践・管理行政・教育研究」-42 年間の経験を通して, 沖縄県立看護大学成人保健看護 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 鈴木信、柳沢京子、鈴木陽子、清水かおり、知花清子、宮里恵美子、クアロン下地のり子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ほおずき書籍	5. 総ページ数 360
3. 書名 「健康長寿100歳時代」の生き甲斐づくり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------